

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

縦横無尽

タテとヨコ色とかたちのフィールドワーク(23) :

開口具3 : 輪状綜統と開口保持具2

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉本, 忍 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5208

無縦横 色とかがたち タテとヨコの ファイールドワーク 23

吉本 忍

開口具3

輪状綜統と開口保持具2

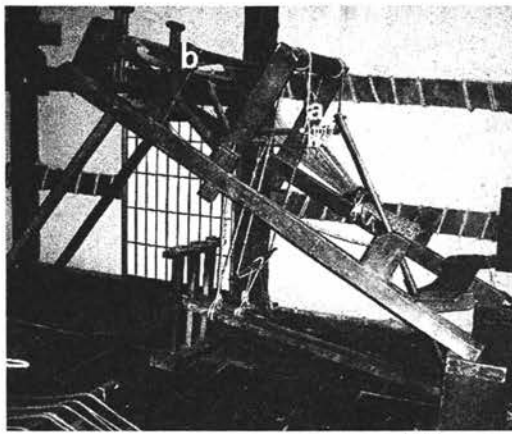


写真1 白峰の単式輪状綜統型 (綜統・開口保持具可動式) の開口具をともなった高機 (白山麓民俗資料館蔵)

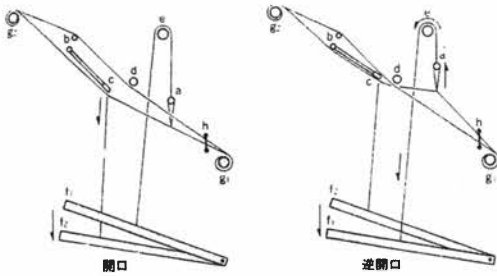


図2 白峰の高機の開口と逆開口
a-輪状綜統、b-開口保持具、c-可動式開口補助具 (押さえ棒)、d-定置式開口補助具 (押さえ棒)、e-ロクロ、f-1~f2-踏み木、g1-布巻き具、g2-タテ巻き具、h-箆

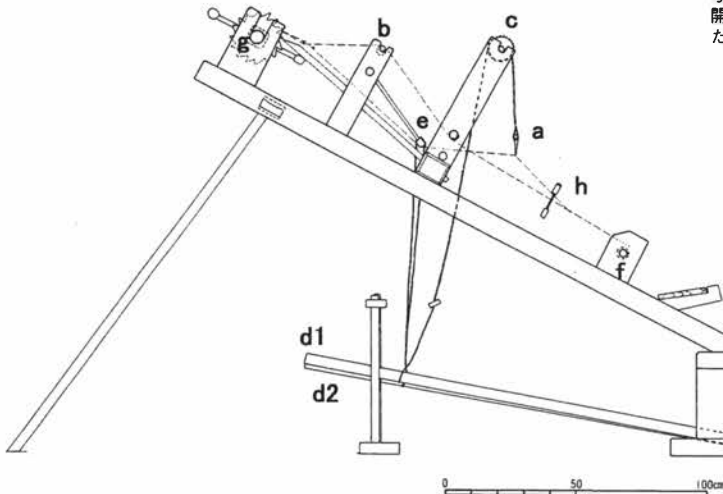


図1 白峰の単式輪状綜統型 (綜統・開口保持具可動式) の開口具をともなった高機 (白山麓民俗資料館蔵:坂本育男氏原図)
a-輪状綜統、b-開口保持具、c-ロクロ、d1~d2-踏み木、e-開口補助具 (押さえ棒)、f-布巻き具、g-タテ巻き具、h-箆、i-座板

先月号で紹介しているように、開口保持具を使ってタテ糸の開口と逆開口をおこなうためには、開口保持具とともに輪状綜統が併用されてきた。また、輪状綜統を使ってタテ糸の開口と逆開口をおこなうためには、2枚の輪状綜統を使用するばあいと、1枚、もしくは2枚1組の開口保持具を併用するばあいがある。輪状綜統と開口保持具によるタテ糸の開口と逆開口は、世界各地でもちいられてきた織機のうち普遍的に見いだされるが、その開口方式を詳しく見てみると、輪状綜統と開口保持具の設置方式の違いから、1枚の輪状綜統と1本の開口保持具を併用した単式輪状綜統型には、綜統・開口保持具可動式、綜統可動・開口保持具定置式、綜統固定・開口保持具可動式という3種類の開口方式がある。また、2枚の輪状綜統と開口保持具2本を併用した複合単式輪状綜統型には綜統・開口保持具可動式という開口方式がある。そして、2枚の輪状綜統を使用した複式輪状綜統型には綜統可動式という開口方式がある。

輪状綜統を使用した開口具、および輪状綜統と開口保持具を併用した開口具のうちには、以上のような5種類の開口方式があるが、それらのうちには特殊な構造をそなえた織機が少なからず見いだされる。今月号では、それらのうちから石川県の白山麓の白峰で使われてきた単式輪状綜統型の高機、中国の雲南省に住む基諾族のもので使われている単式輪状綜統型の腰機、長野県の原村で使われている

複合単式輪状綜統型の高機を紹介する。

白山麓・白峰の高機

この高機は、石川県南部の白山麓西側に位置する白山市白峰(旧白峰村)で、明治時代の中頃から昭和10年頃まで裂き織り用に使われていたもので、現在は白峰の白山麓民俗資料館で収蔵展示されている(写真1)(図1)。現地では裂き織りを「シャックリ」ということから、この高機も「シャックリバタ」と呼ばれていた。

わたしがこの高機の内容を知ったのは1987年のことで、日本民芸協会に所属して織機研究をおこなってこられた故小谷次男氏に、ご自身が主宰されていた京都の上賀茂織機研究所で、白山麓民俗資料館のシャックリバタをもとに復元製作された織機を見せていただいたことをきっかけとしている。

シャックリバタは、全長が3.1mで高さが1.7mという大型の織機で、その外観は西日本で普遍的に使われてきた機台が傾斜した腰機とかわめて類似している。しかし、細部をよく見てみると布巻き具が機台に固定されていることから、腰機ではなく高機として位置づけられるものである。また、開口具についても、今日、日本をはじめとして世界各地で普遍的に使用されている高機の開口具に見られる2枚1組の番目綜統ではなく、腰機と共通する輪状綜統1枚と開口保持具を併用した綜統可動・開口保持具定置式の単式輪状綜統型の開口具がそなわっている。なお、綜統可動・開口保持具定置式の開口方式では、本来は開口具を操作しない状態でタテ糸が開口しており、輪状綜統を引き上げることによってタテ糸の逆開口がおこなわれるが、シャックリバタでは、構造上、開口保持具によるタテ糸の開口が十分でないことから、下糸を押し下げたために開口補助具として押さえ棒がそなわっている。したがって、タテ糸を開口させるさいには、紐を介して押さえ棒につながる踏み木を踏んでタテ糸の開口部を拡大させるという操作がおこなわれる。そして、ロクロにか

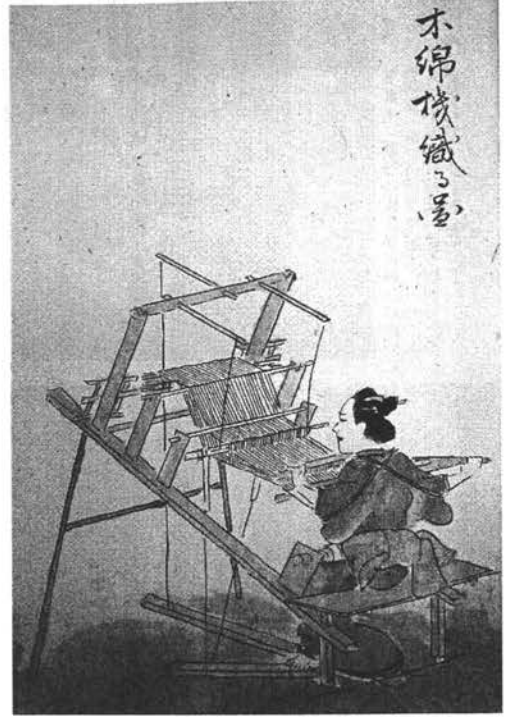


図3 「木綿機織る圖」(『民家検券図』より)

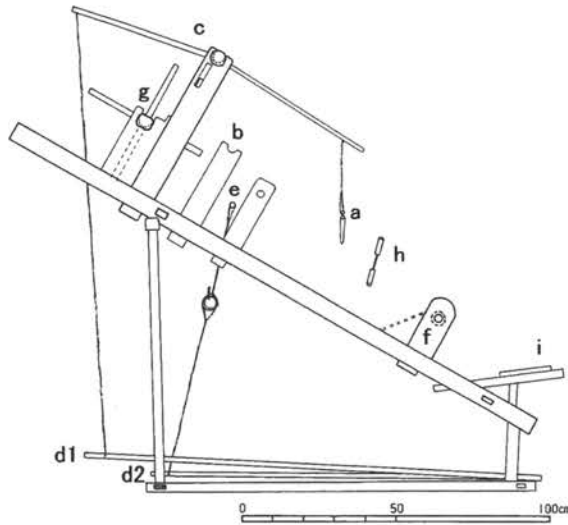


図4 福井県美山町の単式輪状綜統型(綜統・開口保持具可動式)の開口具をともなつた高機(美山町民俗資料館蔵;坂本育男氏原図)
a-輪状綜統、b-開口保持具の支持具、c-招木、d1~d2-踏み木、e-開口補助具(押さえ棒)、f-布巻き具、g-タテ巻き具、h-筵、i-座板

けられた紐を介して輪状綜統につながれた踏み木を踏むことによつてタテ糸の逆開口がおこなわれる(図2)。
なお、シャックリバタと同じ構造をそなえ

た織機の使用例については、白峰以外には知られていないが、類似した型式の高機の図が、幕末の天保年間に北村与右衛門良忠が著した加賀国能美郡の絵農書「民家検券図」に「木綿機織る圖」(図3)として収録されている。また、愛知淑徳学園の小林章男氏、ならびに若狭歴史民俗資料館の坂本育男氏によつて、それと同じ型式と見られる高機が福井県内の美山町民俗資料館、池田町民俗資料館、大野市郷土歴史館などにおいて収蔵されていることが報告されている。これらのうち「木綿機織る圖」と、すべての構成部品が揃っている美山町民俗資料館の高機(図4)を白峰のシャックリバタと比較して見ると、とくには輪状綜統の牽引装置に違いがあり、シャックリバタではロクロ仕掛けの牽引装置がそなわっているのに対して、「木綿機織る圖」と美山町民俗資料館の高機には、わが国の一般的な腰機と同様に招木が牽引装置としてそなわっている。

以上のことから、シャックリバタとその類型である「木綿機織る圖」に見られるような高機が江戸時代後期以降に、石川県から福井県にかけて分布していたことは間違いない。また、このような腰機と高機の特徴を兼ねそなえた高機は、日本以外では知られていないが、福井県から滋賀県にかけては、招木が踏み木につないだ腰機が明治時代、あるいはその後においても使われていたようであり、シャックリバタ、およびその類型の高機は、腰機から高機への移行段階に出現した過渡的な型式であったと考えられる。

基諾族の腰機

固定式の輪状綜統1枚と可動式の開口保持具1本を併用した、綜統固定・開口保持具可動式の単式輪状綜統型の開口具をともなつた織機では、輪状綜統が固定されていることから、開口保持具を動かすことによつてタテ糸の開口と逆開口がおこなわれる。そうした綜統固定・開口保持具可動式の開口具は、シルクロードをはじめ、世界の広範な地域で使用

されている地機や枠機のうちにも数多く見いだされるが、腰機のうちにも同様の開口具をそなえている例を1995年に中国の雲南省南部の西双版纳でおこなつたフィールドワークのさいに、景洪県基諾郷に住む基諾族のもとで確認している。

開口具のうちには綜統固定・開口保持具可動式という開口方式があり、綜統を動かすことなしにタテ糸の開口と逆開口がおこなわれるということについては、われわれ日本人が理解している機織りの常識を超越している。この綜統固定・開口保持具可動式の開口方式をともなつた開口具については、すでに昨年の11月号(284号)で述べているように、わたしは1979年にインドのボンダ人の村、ムドゥリバタでおこなつた地機の調査のおりにはじめて目にしてゐる。そして、その後には同様の開口方式をともなつた開口具を世界各地で地機や枠機を調査するたびに見てきた。しかし、腰機に綜統固定式・開口保持具可動式という開口方式をともなつた開口具をそなえたものがあるということは予想もしていなかつたことであり、基諾族の腰機を見たときには大変に驚いてまたもや声を失つてしまった。

基諾族の腰機による機織りは、屋外でおこなわれている。長く伸ばしたタテ糸の先端部は独鈷状のタテ糸保持具に結ばれており、それはさらに木の幹や柱に紐でくくりつけられている。また、開口具としては、綜統糸と綜統棒で構成された1枚の輪状綜統と1本の太い竹製の開口保持具がある。そして、輪状綜統の両端はH字形に組まれた綜統保持具の上部に刻まれた受け口にはめ込んで固定されている(写真2)。機織りにさいしては、開口保持具を手前に引き寄せることによつてタテ糸の開口がおこなわれ、開口具を速さげることによつてタテ糸の逆開口がおこなわれるが、基諾族の腰機には先のシャックリバタと同様に、開口補助具として押さえ棒がそなわっており、タテ糸の逆開口をおこなうさい、織り手は開口保持具を手前に引き寄せたあとに、押さえ棒にプランコ状につながれた踏み木を



写真2 基諾族の単式輪状綜統型(綜統固定・開口保持具可動式)の開口具をともなった腰機による機織(中国、雲南省景洪県基諾郷:1995年) a-輪状綜統、b-綜統保持具、c-開口保持具、d-開口補助具(押さえ棒)

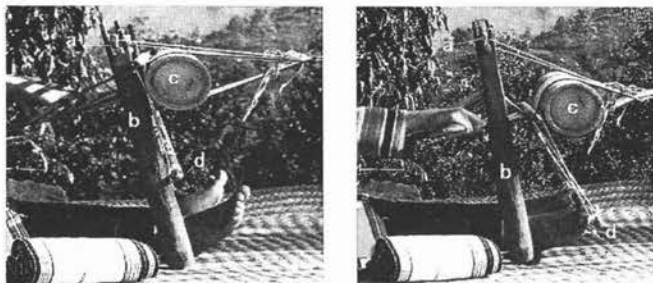


写真3 基諾族の腰機の開口と逆開口(中国、雲南省景洪県基諾郷:1995年) a-綜統棒、b-綜統保持具、c-開口保持具、d-開口補助具(押さえ棒)

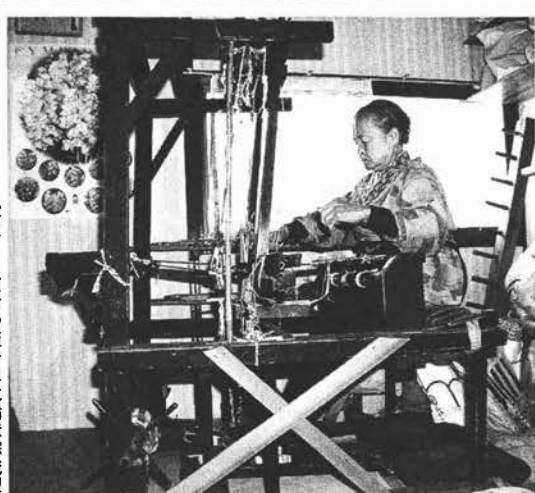
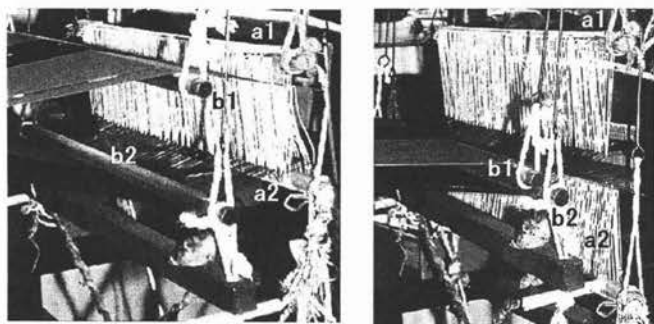


写真4 原村の複合単式輪状綜統型(綜統・開口保持具可動式)の開口具をともなった高機による機織り(長野県原村:1996年)



開口

逆開口

写真5 原村の高機の開口と逆開口(長野県原村:1996年) a1~a2-輪状綜統、b1~b2-開口保持具

開口

逆開口

写真3 基諾族の腰機の開口と逆開口(中国、雲南省景洪県基諾郷:1995年) a-綜統棒、b-綜統保持具、c-開口保持具、d-開口補助具(押さえ棒)

両足で踏んで上糸を引き下げるといふ補助的な操作をおこなっている(写真3)。

腰機で、このような綜統固定・開口保持具可動式の開口具の使用は他に類例を見ない。したがって、基諾族の機織り文化の成立については謎に包まれており、現状では綜統固定・開口保持具可動式の開口具が基諾族のもので独自に発生したか、他からの影響によるものか不明である。ただし、他からの影響によるとすると、雲南省の北西部でチベット族が綜統固定・開口保持具可動式の地機を使用していることや、ウズベキスタンのウズベク人の地機のうちに、基諾族のH字形の綜統保持具と類似した弓状の綜統保持具が見いだされることなどから、それらの機織り文化との関連があったと考えられなくもない。

八ヶ岳山麓・原村の高機

今日、わが国では開口具として2枚1組の番目綜統をともなった高機がもつとも一般的な高機として知られている。しかし、高機のうちには、それとは別に2枚1組の可動式の輪状綜統と2本1組の可動式の開口保持具を併用した複合単式輪状綜統型の開口具をともなった高機があり、長野県の八ヶ岳山麓の南側に位置する原村では、この高機を使用し、今も裂き織りがおこなわれている。(写真4)

原村の高機は、全長1.8m、高さ1.6m、幅1mの比較的小型のものである。2本1組の輪状綜統の綜統糸は一方が上糸にかけられており、他方は下糸にかけられている。それぞれの輪状綜統は、それぞれに紐につながれており、下糸にかけられた輪状綜統の綜統棒は上糸の上にあって、その両端につなげられた紐は機台上部のロクロを介して踏み木に結ばれている。また、上糸にかけられた輪状綜統の綜統棒は下糸の下にあり、その両端につなげられた紐は踏み木に直接結ばれている。一方、上糸と下糸のあいだに通されている2本1組の開口保持棒も、それぞれ両端が紐につながれており、1本の開口保持棒の両端につなげられた紐は、機台上部のロクロを介して踏み木に結ばれて

いる。そして、もう1本の開口保持棒の両端につなげられた紐は踏み木に直接結ばれている。このような2枚1組の輪状綜統と2本1組の開口保持具で構成された複合単式綜統型の開口具の開口方式は、綜統・開口保持具可動式であり、開口保持棒に紐でつながっている踏み木を踏むことによってタテ糸の開口がおこなわれ、輪状綜統に紐でつながっている踏み木を踏むことによってタテ糸の逆開口がおこなわれる(写真5)。

以上のような複合単式輪状綜統型の開口具ともなった高機は、白峰のシャククリバタと同様に、腰機から高機への移行段階において出現した織機の型式と考えられる。なお、同型式の高機については、海外での使用例は知られておらず、わたしはこれまでに国内で、原村とその周辺の市町村のほかに、愛知県の知多半島、山口県阿東町徳佐、沖縄県石川市で使用されていたことを確認しているが、そのほかに滋賀県と高知県でも使われていたことが、小林章男氏の調査によってあきらかになっている。

(国立民族学博物館民族文化研究部教授)

よしもと・しのぶ

文献

北村与右衛門良忠

1995年 「民家検券図」(復刻本) 石川

県図書館協会。

小林章男

1996年 「福井県の地機」福井県立博物館調査研究報告書 福井県の手織機と紡織用具。

坂本育男

1996年 「地機のタイプと資料」福井県立博物館調査研究報告書 福井県の手織機と紡織用具。

吉本 忍

1987年 「手織機の構造・機能論的分析と分類」国立民族学博物館研究報告 12巻2号。